

一流は一流を知る

新宿に洋服店「ひよしや」をオープンして約60年。
その創作活動において一貫して追求してきたのが、“東と西の融合(East meets West)”。
ハナエモリのブランドに流れるのは、日本人としてのルーツであり、
日本独特の簡素な美しさと、女性らしい繊細な感性だ。手作りから生まれた、上品な存在感。
それは、凛とした女性のファッションであり、ライフスタイルであり続ける。

自分を見つけて、磨くこと

“一流”というのは、人が認めてくださるもの。でも誰もががんばって、身に付けていくべきものだとも思います。ファッションでいえば、エレガントな美しさでしょうか。それは自分で決められるものではありません。「上品で、とても美しく見える」と、人に認めていただいてこそ一流のファッションだと思います。

一流にもいろいろありますが、誰でもなれる素質はあると思います。磨き方は、人それぞれ。まず自分自身の個性をみつけること、自分が好きなことならどんなときでも続けていきます。それが成長していくパワーにもなるとも思います。自分の好きなことを磨き続けられれば、誰もが“一流”になれると思うのです。

私は、主人にシャツくらい縫ってあげたい、子どもたちに洋服を作ってあげたいと軽い気持ちで洋裁を始めました。特別な夢や目標があったわけではありません。もともと手で作ることが好きでしたし、結婚後は時間がたくさんあって、それに戦後は物のない時代でしたから着たい服が手に入らなかった。それで「自分の手で服を作りたい」と思ったのです。基礎を学んで、実

際にポケットひとつでも形になると嬉しくて、こんなに面白いものかと服作りに目覚めました。だんだん自分のためよりも、人に着せたくになりました。私が作った服を着て、似合っていて、「着ていて気持ちがいい」と言ってくれれば、嬉しかったですね。そのうち映画の女優さんの衣裳もたくさん手がけるようになり、いま思えば、楽しさよりも追い立てられている感じ。女性では気づかないような、男性の目



1966年に「アメリカン・ヴォーグ」を飾った菊のハジマドレス 撮影：リチャード・アウエンド

で育った女性たちの着こなしは、さりげなく美しく、エレガントでした。女性らしさ、その人らしさと言うのでしょうか…。着るものの役割が見えてきたような気がして、私は少しずつ元気を取り戻していきました。

同じ年の夏、戦後、日本にモダンライフをもたらした国はどなたか知りたくて、アメリカに行きました。

フランスやアメリカなど海外のファッションに触れて思ったのは、日本には独自の伝統があるということ。日本には素晴らしい歴史や文化があることを再認識した私は、世界に挑戦したいと考えるようになりました。日本の布地を用い、日本人の手と感性で作った作品を、日本のジェット機に乗せて、アメリカへ持って行く。それから



新宿のサロンで(1950年代) 撮影：石井幸之助

から見た“女の魅力”について監督さんに教えられ、とても勉強になった時代でした。

自分のルーツを原動力に

1961年1月に訪れたパリは、ちょうどオートクチュールの季節でした。心身ともに疲れて仕事を辞めようかと考えての渡仏でしたが、シャネルやピエール・カルダン、ジバンシィなどキラキラした一流の才能が輝いていて、日本とは全く違う世界がありました。着るものには、それぞれ特色があります。洋服は“平面”である日本の着物と違って“立体”なのだ、伝統的なパリのファッション界に触れて実感しました。洋服の文化の中

“MIYABIYAKA(雅やか)”をテーマにニューヨークでショーをするまで4年かかりました。高い評価をいただいたのは、日本の伝統を学び、取り入れ、試作を重ねた結果でした。大切なのは、その人の“ルーツ”です。自分のルーツをしっかりと持ちながら、世界へ表現していくことが大事だと思います。

私は幼時を島根県の田舎で育ちましたから、そのころ見ていた風景がずっと心の中にあります。それが私の原点。モンシロチョウの飛び交う風景が、私のエネルギーです。チョウは不思議ですね、世界のそれぞれの風景の中に違った種類が飛んでいます。私のモンシロチョウは、いまもハナエモリのブランドに生きています。



2004-2005秋冬 ハナエモリ・オートクチュールコレクションより

ファッションデザイナー 森 英恵

(もり・はなえ)

1926年島根県吉賀町(旧六日市町)生まれ。東京女子大学卒業。1951年新宿にスタジオ設立。50年代～60年代初の日本映画全盛期に多くの衣裳デザインを手がける。63年本格的にプラモデル分野に進出。65年ニューヨークで初の海外コレクションを発表。「East meets West」と絶賛を得る。77年パリにメゾンをオープンし、パリ・オートクチュール組合に所属する唯一の東洋人として国際的なデザイン活動を展開。ミラノ・スカラ座での「マダム・バタフライ」をはじめとしたオペラ、バレエ、創作能、新作歌舞伎などの舞台衣裳も手がける。2005年森英恵ファッション文化財団を設立。若手の育成にも力を注ぐ。紫綬褒章、文化勲章、レジオンドヌール勲章、朝日賞、毎日ファッション大賞特別賞他、受賞多数。

モンシロチョウの飛び交う風景が私という日本人の原点でした。

日本人としての存在感

これまで服のデザインから映画、オペラ、バレエ、歌舞伎、能などの衣裳を手がけ、オリンピックの公式ユニフォームなどさまざまな仕事をしてきました。いずれもその場にふさわしく、エレガントであることを意識してデザインしました。学校の制服にも力を入れたのは、伸び盛り子どもたちの美意識を大事にしたいと思ったからです。成長の過程において、きちんとしたものを着ることが大切。授業で知識を学ぶように、日常生活の中で子どものころから衣服の基本を身に付けることが必要だと思います。



2004年、パリで発表した最後のオートクチュールコレクションのフィナーレ。モデルは孫娘の森泉

若い人たちに伝えたいのは、“手で作る”ことの楽しさです。山から木を切ってきて彫刻するのも、食材を用意して料理するのも、衣服を作るのも同じこと。何も無いところから何かを作り出すのは素晴らしい。世界的に手仕事が少ないのは寂しいことですが、子どもたちにとって、いつの時代も“手で作る”のは楽しいこと。脳を刺激して、感性も磨いてくれます。

何十年も走り続けてきましたが、手で作る仕事が続くように次の世代へバトンタッチしていけたら嬉しいですね。そして、私たちは日本人であること。地球上の日本という国、日本人という存在感を意識し、輝かせていってほしいと願っています。



〈お中元推奨品〉

自然の恵み、伝統の技、人の手で作る本物の旨さ。

全国各地への発送も承っております
お申し込みはフリーダイヤル(料金無料)をご利用ください
0120-1728-19
■通話料無料 ■承り時間/9時～17時(日曜・祝日を除く)
FAX0120-1728-46
■通話料無料 ■24時間受付

インターネットからもご購入いただけます <http://www.kanbun.co.jp>

- お届け先1カ所につき商品合計額が5,250円(税込)以上は、送料無料で、5,250円(税込)未満の場合は420円(税込)となります。
- お支払いは、郵便局・コンビニ・代引(手数料315円(税込))・クレジットカードでお支払いします。(21,000円以上お買上げの場合は、代引またはクレジットカードで)
- 商品のお届けはご注文受付後、通常7日前後です。着日指定も承ります。
- ご不明な点は、左記フリーダイヤルまでお気軽にお問い合わせください。
- 沖縄県、鹿児島へのお届けの場合は、離島配送料金630円(税込)を、別途加算させていただきますのでご了承ください。



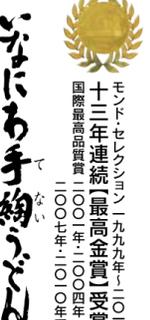
▲いなにわそうめん・寒造り/木箱 NKS30(そうめん40g×20束入) 3,150円



▲いなにわそうめん・寒造り/木箱 NKS30(そうめん40g×20束入) 3,150円



▲いなにわそうめん・寒造り/木箱 WK10(うどん200g×5袋) 3,885円



▲いなにわそうめん・寒造り/木箱 WK10(うどん200g×5袋) 3,885円



モンド・セレクション 2011 最高金賞「ゴールドメダル」

寛文五年堂